教員名	天野　知香　(AMANO　Chika)
所　属	人間文化研究科比較社会文化学専攻表象芸術論講座
学　位	博士　(文学)
職　名	助教授
URL　／　E-mail	chika@cc.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

フェミニズム美術史　／　アンリ・マティス　／　装飾芸術　／　女性芸術家　／　視覚表象分析理論

◆主要業績　　総数　(　4　)件

・天野　知香　「装飾芸術の時代」鈴木　博之・石山　修武・伊藤　毅・山岸　常人編、
『シリーズ都市・建築・歴史　第八巻　近代化の波及』東京大学出版、2006 年、pp.241-288.
・天野　知香　「フランスにおける「装飾」の位相」、東京国立近代美術館編、
『国際シンポジウム報告書　琳派 RIMPA』、ブリュッケ、2006 年、pp.59-77 .
・天野　知香　「メディアと美術ーマティスをめぐる断想」、『美術フォーラム 21』、2006 年、Vol.14,pp.43-51.
・天野　知香　「アカデミー・マティスの女性画家ーマリー・ヴァシリエフ」、
『科研費研究成果報告書　近代日本の女性美術家と女性像に関する研究』、2007 年 3 月、pp.42-80.

◆研究内容

フランスを中心とした 19-20 世紀美術からさらに現代の視覚表象一般を視野に入れ、フェミニズム美術史をはじめとする現在の表象分析理論の成果を取り入れながら分析理論の検討を行う一方、特にフランス 20 世紀の画家アンリ・マティスやその同時代の女性芸術家、装飾家等の事例、および現代の視覚表象についての実証的な資料の収集・研究を通して、分析理論や方法の実践的な活用と検討を試みている。2006 年度は特に科研研究の一環としてマティスのアトリエで学んだ女性芸術家マリー・ヴァシリエフの未公開資料をフランスの個人収集家のもとで調査する機会に恵まれ、この芸術家の活動についての学術的な検討の先鞭をつけることができた。また、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける装飾と芸術の位相をめぐるこれまでの研究を新たにまとめる機会も得た。現在もマティスや近現代の女性芸術家による具体的な事例に即して、視覚表象分析の理論的検討をこれまで以上に精緻に進める研究を継続中である。

◆教育内容

美術史の学問的な枠組みを再検討し、歴史的、社会的な位相において視覚表象をどのように捉え、分析するかに関する方法論的な視点を養うことを重視した。論文購読や授業を通じ、フェミニズム、ポストコロニアリズムを含めた多様な方法論を検討し、具体的な視覚表象分析の実践を通して、どのような立場や視点から視覚表象に向き合うのかを自覚的に考察しながら、実証的論理的に対象を論じる力を養うことを主眼とした。講義においては、具体的な事例をフランスを中心とした 19, 20 世紀の美術の中からとりながら、上記の視点から分析の試みを示し、またゼミにおいては、英文、仏文による理論的な方法論的な文献の精読とともに、文献収集や調査の方法を学ばせた。さらに各人の研究発表を通して表象分析の実践を促し、参加者同士の議論を通じて、その方法論に対する自覚を養い、実証的な論証の訓練を重ね、論理的な思考力や構成力の養成に力を注いだ。

◆将来の研究計画・研究の展望

将来的には現在取り組んでいる視覚表象分析の方法論的研究を、理論的検討および具体的な分析の実践の両面を通して学際的な見地からさらに精緻なものとし、他領域との連携をより柔軟に図りうるものとしてゆきたい。そのことによって美術史学を、現代の社会において、閉ざされた停滞的な一学問領域ではなく、かつまた単なる文化研究の一部として視覚表象分析の一翼を担うにとどまらない、開かれた意味深いあり方において実践することを目指すものである。

◆受験生等へのメッセージ

メディアにあふれている「美術」についての固定的な観念からまず自由になってほしい。そして自分がこれまで生きてきた中でどのような考えを持ち、どのような感性を養ってきたのかを自ら確かめながら、直接視覚的なイメージと向き合ってみてほしい。「美術」について感じることは知的な検討を放棄することはではない。その時自覚される感性や考え方、知識は、あなた個人のものであると同時にあなたの生きてきた歴史や社会と密接に結びついているものである。「美術」であれ、私たちの日常を取り巻くイメージであれ、それらを見、また生産することは私たちが日々過ごしてる現実の社会や生活と直接密接に結びついた体験であり、視覚表象の意味やあり方はそれが生産され受容される歴史や社会と切り離せない。美術史とはそのような視覚表象の意味生産のプロセスやあり方を実証的論理的に研究する学問です。視覚的なイメージと論理的実証的に対話することを通じて、これまでの「私」を揺るがし、時代や社会との関わりを見据え、捉え直してみて欲しい。